



まちてくギャラリー

2014年3月～4月の展示 鵜澤明民・新里陽一 #4



今年も田んぼに水が張られて苗がうえられました。それまで乾いた土の田が
むき出しだったものが、陽の光を水に反射して輝き、風を受けて細波がきら
きらとラインダンスのようにいきいきと躍動しているのを見ると、こちらの
体にまで水分がみなぎって、体の芯まで潤ってきます。水は命の素でこの中
に多様な命が溢れるように生まれるのです。

このまちは「土沢商店街」の北側にある丘、館山に当時あった城を中心に発展した、いわゆる城下町でした。商店街の道は金石街道として鉄道と平行しており、昭和までは賑わっていました。

このまちに生まれ育った萬鉄五郎を顕彰する萬鉄五郎記念美術館があり、それを文化的、できれば商業的にもカナメにしようという気分が醸成しているとおもうのは私だけではなく、「アート@つちざわ」しかり、クラフトマーケットもそうした、まちの思いの延長です。

一時的なイベントではなく、これは通年で作品を観ることができる、歩けば見える景色の一部です。ですがそう簡単に景色になったと認められるには、まだ道のりが遠いと感じています。

そこで、いわば道に沿った塀に開いたフシ穴みたいなものと私は捉えることにしています。そのフシ穴を覗けば、見えるのは、意外にも自分自身に呼び掛ける自分を励ますかけ声のこだまに揺れ動く蜘蛛の巣だったります。



<http://machikado.urdr.weblife.me> でも見るができます。



たばこの看板のとなりになにに掛けられた小さな作品の中にも不思議な話がひっそりとですが、たくさん隠れていました。

いつもの 日常の風景

「街かど美術館」では普段はあまり接点がないような、芸術をまちの中に、ばらまきように置きました。普段の生活の中に芸術を持ってきたら、日常の生活が少し変わって、普段あまり感じない「芸術」ってなんだ。ということを感じたり、考える事になるかも知れないというきっかけ作りでもありました。

また、突然降って湧いたように、作品がそこに現れて、沢山の人がそれがそれを見に来るので、いやでもそこにある作品を観たり、意識したりで、何かしら考えずにいられなくなる出来事でした。普段の生活の中でもそういうことを考えることで、日常に句読点をつけることにもなったのだと思います。

そういう意味では、特別な出来事だったと思います。

この「まちてくギャラリー」は毎日そこに小さな写真がまちのあちこちに、展示されていて、毎日そこにあるということは、見慣れてしまえば、何でもない普段の景色になっているということです。

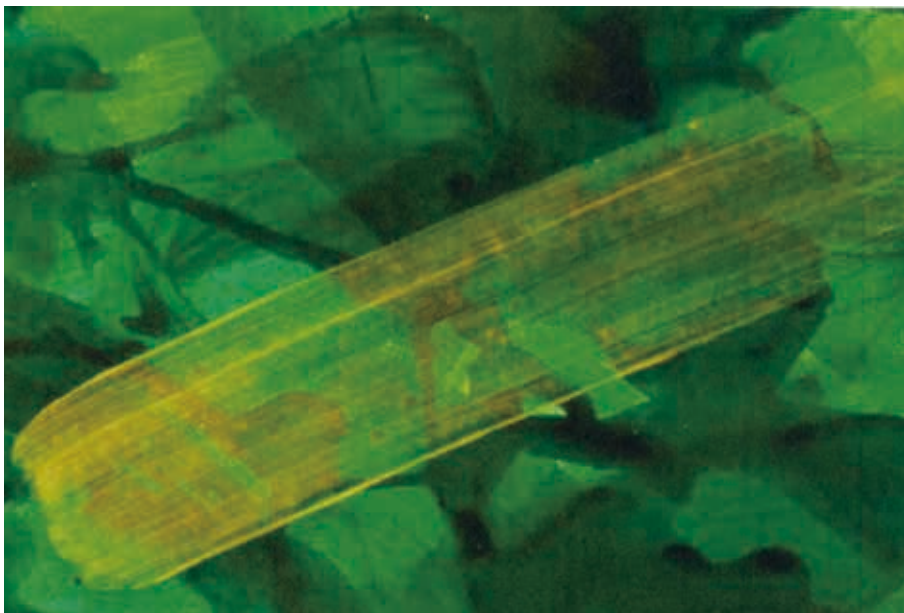
いつもそこにあるということは、特に見なくても、そこにあるということは知っているよ。ということでもあります。

何か関心があれば見るけれど、なければ見なくてもいいよね。という感じで、簡単にやり過ぎます。それって、実は大変な事、大事な事なんだよ。

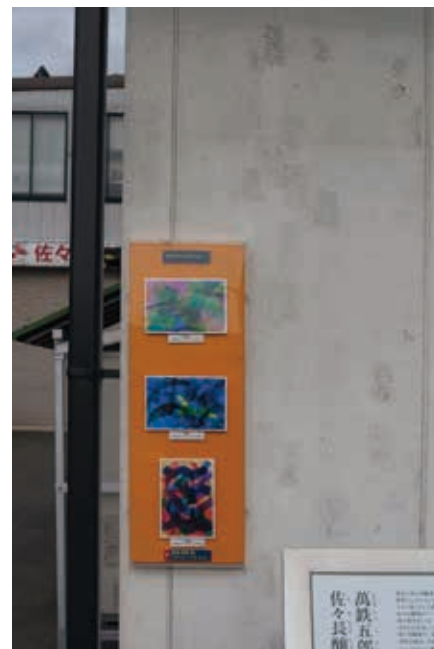
いつもそこにあつて、たいしてまじめに眺めることもなかったけれど、実は沢山の意味を持った作品がすぐとなりにあつたんだから。

いつもの、あの小さな作品の写真が少し違う日々のことを語っていたんだ、ということをつまに思い出して観てもらえれば、いつか世界の拡がっていることも感じられるのかも知れません。

それが、特別な日を作ることになるかもしれないのだから。



生成 (22) 1995 ボードにアクリル 21x30cm



⑥ 佐々長醸造 鶴澤明民



⑩ 平沢宅 鶴澤明民

しかたがないかも知れないけど：

菅沼緑

昔の映画で、あれはなんだったでしょうか「世界残酷物語」で見たんでしょうか、アメリカのある村では、そこへは馬車で行かなければならない地区があるという話でした。間違つてそこへ車で入ると、銃で撃たれてしまうくらい、保守。「的」などと付けていられないくらいに、旧態を守るキリスト教徒の村があるんだそう。そういうこともそこでは紹介されていました。

もちろん電気も使えない、古い生活様式を守り、新しいものには、なにもいいものはない、という教えをかたくなに守っているというような話でした。

そりゃそうだろう。新しいと言うことは生活を変えることでもあるし、未知のものを受け入れるには冒険もしなければなりません。冒険は危険で破壊にも繋がりがかねないというおそれも当然です。

そのくせに鉄砲はいいのか？とその時に疑問に思つたけど、アメリカでは自然なのかも知れません。

古しきたりに沿って生きて、前例にないことはしなければ、判断に苦しむこともない。

新しい判断を求められる出来事ってないのかなと、その時に思われ、

以来その話はずっと、私には引っぱり続けている問題のひとつでした。

鶴澤さんとは、はたち頃からの仲間として、一緒に活動をしていたあいだ柄です。家族と一緒にいるよりも多く時間をすごした時期もあると思うくらい、よく一緒にいました。一緒にいて多くの話をしました。彼もまた吉本隆明の本を読み深く共鳴をする若者のひとりでしたが、私はもっぱら鶴澤さんからその話を聴く専門で一度も読んだことはありませんでした。

そうした話の中で、今でもよく覚えている彼の言葉は「緑さんもイメージの問題を考えるべきだ」というひとことです。当時から、今でもそうなのですが、私は実感しなければ理解できないタイプで、その言葉にそんなんだろうと感じはしても、今同様「イメージ」ということの意味がよく理解できていませんでした。

今回この「マチてくギャラリー」の事に協力をお願いして、鶴澤さんとも何度か手紙や電話を繰り返し、彼の文章を読み返すと若い頃のことばかりがよみがえるような気がしましたが、鶴澤さんは物事に対するスタンスがなにも変わっていないということでした。「共同幻想」という社会がくり出す認識の方法をまず解体して、その構造を知った上で「イメージ」を組み立てろ。ということだと思えます。それは当然すぎるくらい当然な話で、「幻想」の意味をきちんと知った上でなければ、自らの、より自由な「想像」はあり得ないということだと思えます。

想像の自由ということもまた幻想でしかないのですが、私たちが生



生成 1993 ボードにアクリル 10x15cm



生成≡光≡影 2013 アクリル板にアクリル絵の具

きているこの今という時間と、世界という空間をイメージして実感を深めながら生きてゆくしか方法はないのでしょうか。

どんな生き方をしようが、あるいは死に方をしたとしても一生は一生だし、一生を秤にかけて比べることも意味がありません。でも、この意味という言葉がくせ者で、この言葉の意味に私たちは振り回され、そのために無理矢理へりくつをこね回し、訳も分からないうちに幕を落とされて現世に見切りをつけられてしまうのでしょうか。

と、まあなんとも厭世的な言い回しで申し訳ありませんが、その上で人生を楽しむ事ができれば喜びもまたひとしおということでしょう。

しかし、鵜澤さんの場合、いや私もそうなのですけど、ひとり生きていくと思っても決してそうではなく社会という流れの中で翻弄されつつ生きて行くしかない小さな個人がただ流されるだけではなく、社会の構造を少しでも知ろうとする。そして、その違和感を質すためにも自らの意見を明確にしておかなければ、不満は拡大するばかりだという基本的な位置があると思います。

現実という大いなる虚構を感じた上で、展開する美術に多様な感覚があるということ認識した上で、鵜澤さんの美術に対する基本的な考えには「何が絵画を絵画たらしめているのかを探索すること」という言葉が出てきます。

絵画には絵画に固有な特性があつて、どんなに絵画の要素を分解しても美術には魅力が尽きないという、その魅力がエネルギーになっているのだ

と鵜澤さんは彼の文章の中で語っています。

それが、芸術の大きな目的でもあり、原点でもあるのだらうと、今回つくづく思います。

古きを護ることも、ひとつの方法かも知れませんが、未知のものに惹かれて、そこをつついてみたくなる好奇心が人間をここまでゆがんだ猿にしてくれたのだらうと思いますが、どんなにゆがもうが、一度走り始めた好奇心は留めることができない、という決定的な欠陥的特性を含んでいるのだらう。

節度を知らない猿のつくり出した社会が残酷物語であり、かけがえのないこの地球をも、ゆがんだ空間におとしめて自分の立つ場所がなくなっても戻ることができないのかも知れません。

これも古い映画の「気狂いピエロ」のラストシーンで頭に巻き付けたダイナマイトの導火線に火をつけてから、慌ててその火をもみ消そうとするジャン・ポール・ベルモンドが演じるフェルディナン。ドーンと爆発して硝煙が海岸に立ちのぼり、画面にはアルチュール・ランボーの詩が書かれて終わります。

「もう一度見つけた なにを？永遠は太陽と番った海だ」といっても、もうしかたがないのです。

でも、しかたがないという言葉ほどしかたがないものはないような気がします。



生成≒光≒影 2013 アクリル板にアクリル絵の具



生成≒光≒影 2013 アクリル板にアクリル絵の具

実は私は、この「美術」ということについて、まだまだよく分からないことだらけで、かなりとんちんかん話をしてしまっているのかも知れませんが、なかかわらず、知ったかぶりをして、今までの経験値を宛てにして、かなり感覚的に、結果としてはそういうこと（実感したということ）になってしまっていると思います。

そして、鶴澤さんがいうように「イメージの問題を考えた方がいい：」ということ振り返ってみると、私たち人間の生活はこの「イメージ」によってそのほとんどの部分が成り立っているのではないのでしょうか。考えるということ自体が、イメージする事として基本になっていると思います。昨日のことを思い出すことも、来週の予定を調整したり、商売をすることもすべてがこの「イメージ」の能力によって処理されています。英語では想像することから、眼に見えている画像までイメージです。創造という言葉は作るということを表して、英語ではクリエーションですが、これは「天地創造」から始まっているそうです。

つまり世界を作ることとは、人と物の関係のあいだに、イメージが大きく横たわっていて、イメージというク・ツ・シ・ョ・ンがなければものを考えるということの多様性は生まれなかったのではないのでしょうか。

世界を想像する時に、剩りにも大きく拡がるイメージに区切りをつけるために、神を持ち出したり、その神のなせる技であれば「しかたがない」事で済ませることもできたのですが、神もイメージであるならばそうもいってられない厳しさに直面しているのでしょうか。



イメージの生まれ方

菅沼緑

この回に鶴澤さんと一緒に展示をさせてもらったのは、新里陽一さんです。鶴澤さんと対極的な存在として考えてみたいと思ったからです。彼もやはり、学生時代からの仲間です。

青春の時間を共有しながら時代の波にもまれて、荒波を泳ぎ切つてみたり、溺れて沈んでみたことも、多少の違いはあるものの、同じようなステージである時はライトに照らされ、はみ出したり振り回されたりしながらも40年以上これにしがみつき、そこで存在をし続けたのです。

ある意味それは共に戦う仲間でもあり、見えない敵を相手に格闘を続けるしかない孤独な作業者でもあるわけです。

「マチてくギャラリー」に写真の提供を新里さんをお願いした時、彼が私に見せてくれたのが、ここに出した、ハガキ大のスケッチブックでした。

ここ何年か続けているという日記帳です。

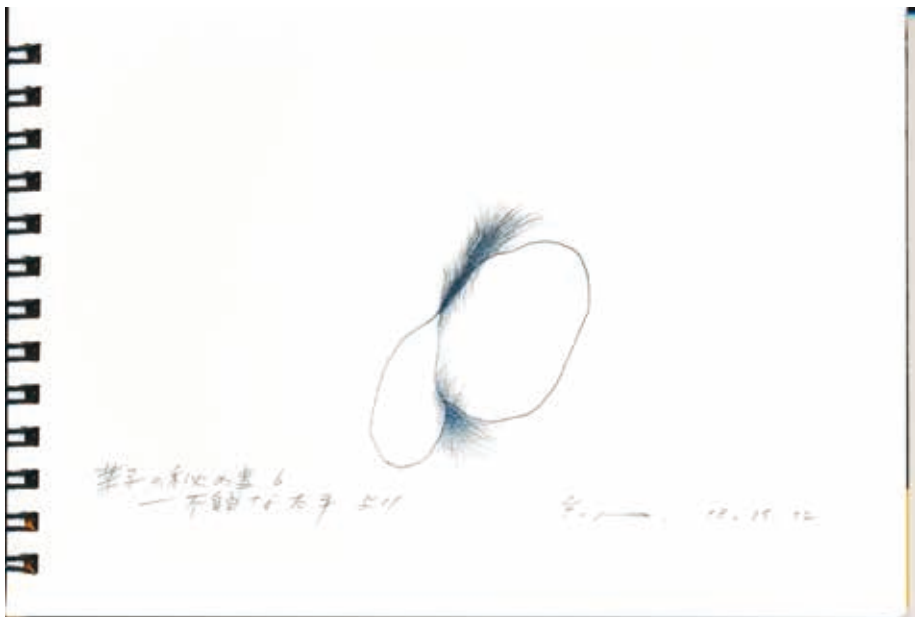
毎日何かしらのスケッチをここに描きとめていて、それが何冊かできていくということでした。

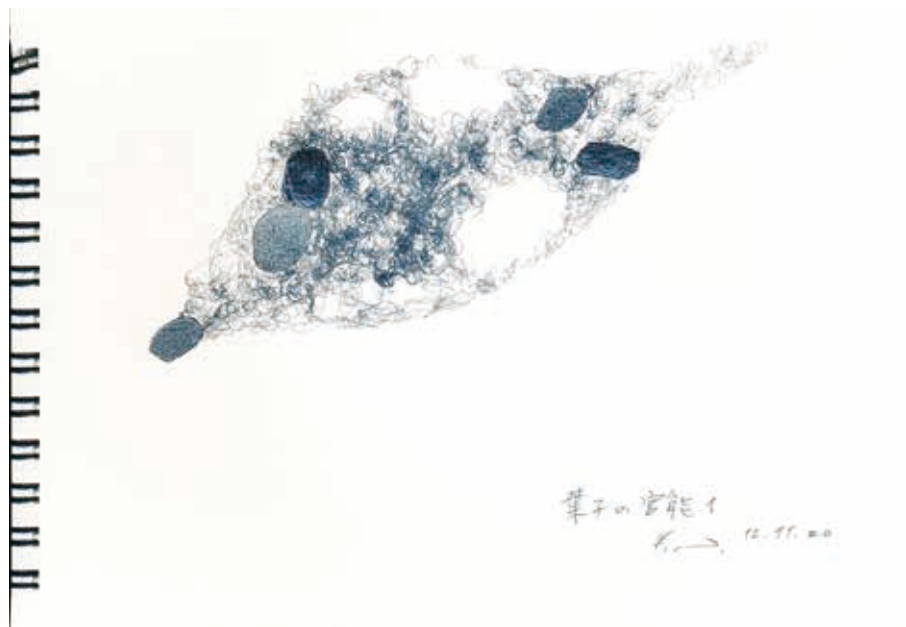
「葉子ストーリー」というタイトルのついた小さなスケッチブックは鉛筆やカラーペンで彩色されていますが、鉛筆を押しつける手の圧力が執拗なまでに高められ、塗り重ねられて黒鉛の層が光るくらいに塗り固められています。このことは非常に意味があると思いました。

その執拗さとは裏腹に、非常に淡泊に描かれているページも所々に見えます。毎日描きためるということは、非常に困難なことで、義務化された楽しみは、すでに強制なので、愉悦などとは対極の存在です。

おそらく鉛筆を持ってページを開いたものの、なんの用意もされていない、白いページほど重いものはないはずです。そういうときは、とにかく手を動かして、なにがしかの痕跡だけでも残そうとして、意味不明な描画に走るのです。むしろそういう時の方が、素というものが持っている力が発揮されると思います。その苦しさがもろに見えるようなドローイングも随所にあつたように思いますが、その他のページの作品も新里さんが昔からテーマとして続けている形がここでも様々に姿を変えて顔を出していると思いました。

14ページの「葉子の3人の男友達」というドローイングもひとつの核になる形から増殖するように増え続ける形の現れ方を踏まえているように思います。つまり、イメージ、と簡単に人が想像するさまざまな形式のことをざっくりばらんに呼びますが、イメージというものはそれほどストレートに生まれてくるものでもなくて、何かひとつのパターンというか、ひな形のようなものが必要なこともあるのだな、と





思いました。

全く、ゼロのところに唐突になにかのイメージが湧いてでるのではなく、何かしらのテーマがあったり、契機となる想像が引用をするように、新しいイメージを生み出すのが、人の想像を生む条件なのではないのだろうかと思ったわけです。

それこそテコの棒のように想像が働いてイメージが持ち上がる、というパターンのような気がするのです。

イメージがイメージだけで独立した存在なわけでもなく、想像力のテコが働いて、想像の闇の重しをテコが押し上げるとその下から、イメージという光が、まるで天岩戸のごとく漏れてくるのではないのでしょうか。

新里さんはいつも想像力をもてあますがごく溢れさせて、しかも同時多発的に溢れるイメージがガラスからこぼれ落ちて、テーブルに拡がります。

私などはガラスからこぼれるのを見た時点で、收拾がつかなくなってしまう、それ以後の言葉がすべて理解不能になってしまいます。それも私の想像力が作るパターンがおそらく適合不能を引き起こしてしまうのでしょうか。

それはともかく、新里さんのイメージの奔放な広がり、いくら自由であっても、やはり、人の持つ想像力のパターンからは自由ではないはずなのです。

想像力や想像するということは、人がコミュニケーションをする上でもっとも画期的な能力として猿と決別する進化の最大の成果だった

たのでしょう。脳の構造や機能については何も知りませんが、想像力は脳の能力だけではなく、「心」的な力でもあると思いますが、それはおそらく脳の機能だけではなく、「心」という存在、心は脳の一部なのかも知れませんが、少なくとも、頭で考えるだけではなく、気持ちとか、感情の領域は前頭葉だけではないと思うのです。

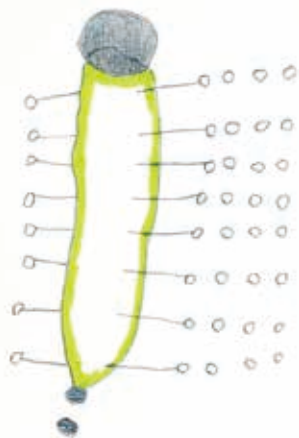
そうした不可思議な能力を得た私たちは、ものごとのありようを人と共有するために、想像という力を得て、しかも心という場所だと思ふのですが、人それぞれが子どもの頃から育て続けた想像のパターンの中で、想像のテコを「イメージ」という最強の道具を働かせながら、歴史を作ってきたのだと思うのです。

そうやって作り上げた想像を「幻想」と「現実」に分けていますがこの仕分けがじつに曖昧でどこにその境目があるのか、私にはさっぱり分かりません。だいたい境界は、経験則で何となく線を引きますが。

ひとりの人の想像力が、作り上げた「イメージ」を共有して、そこに現れるある種の感情が幻想なのか、「実感」なのか。

「実感」とはなんなのだろう。新里さんが溢れるように連発するイメージの嵐も、もちろん彼自身の意思や感覚に基づいているのだけど、実は想像というのがある

パターンの中でやっている、心的現象なんだろうな。そんなことを言うと身も蓋もないけれど、新里さんの「溢れる「イメージ」」に対して、それほど怖れを持たなくてもいいかなという気になってきます。



しずくいし奇譚 ―切り抜き帳より

藤崎しげる

1

東和町の、先輩である S r 氏からの依頼を受けて、まちテクぶちギャラリー（仮称）のスタッフとして参加することになりました。

話は今年（14年）の1月28日火曜日の事柄から始めることにします。
昨日青空、今日は雪、明日の天気は分からない。

幼い少女は土手に積もった雪を前にして立ち尽くし1本の枯れた小枝を持っていた。僕にはその枯れた小枝が可憐に咲いている花に見えたのだ。僕は「こんにちは」と幼い少女に声をかけていた。あまりにも可愛らしく、無垢な姿に映ったのかも知れない。幼い少女は振り向きにつこり笑いながら「こんにちは？」と答えてくれた。雪は、先程より多くなってきた気がする。幼い少女は、再び土手の方に向き直り枯れた小枝に話しかけるようにじつと見つめ始めた。買物に出て来ていた僕は急ぐことにした。歩きながら幼い少女の方を見返ると、まだ枯れた小枝を、いや可憐な花を持ち立っている。祈っているようにも見える。その柔らかな笑顔が、僕の記憶の印画紙にくっきりと焼き付けられた。

雪の降らない土地の人に、雪景色を語ることはタブーなことだろうか。雨の降らない土地の人に、雨景色を語ることは夢みたいな事だろうか。などと考えながら二日酔いの重い足取りで毎日のように買いに来るスーパーにどうにか辿り着いた。

寒気がする。もやし、鰯の開き、漬け物、昆布の佃煮、野菜のかき揚げ、3切れの食パン、飲むヨーグルト、そして500ミリリットルの缶ビール4本を籠の中に入れレシジで料金を支払う。午後1時過ぎである。外に出ると、雪は止んでいた。幼い少女は、やはり土手のところにはいなかった。僕は枯れた小枝、いや可憐な花を探してみたのだがどこにも見当たらなかった。持って帰ったのだろうか、僕は首を傾げ自分の足下を注意深く見た。小さな2つの足跡が可愛らしく残っているのだ。太陽が、雲間から少しだけ顔を出し辺りを俄に明るくした。なぜか僕の気持ちは暖かい趣になっていた。

飛ぶためには、意識がいる。落ちるためには、心がいる。都会から遠く距離を持つことに郷愁という言葉が僕を主人公にしてくれる。やることも、怠けることもすべて自由である。そして時間が経過して1日が終わる。明日が来なくても明日のことが分かる。くり返される日々、急変する天気のように僕の気持ちに寂しさがこみ上げていた。太陽は雲に隠れ、雪がまた降ってきた。

雪の降る土地の人に、雪景色を語るとセンチメンタルになるという。雨の降る土地の人に、雨景色を語るとロマンになるという。

そろそろ本題に入らねばいけない。

千葉に住むN t氏は、どうしているだろう。元気で精力的に活躍していることは間違いないはずだ。僕はN t氏の作品が好きである。自らの実家の田んぼの土を利用したり真鍮板などを使用したインスタレーションの表現をしている。僕が関東にいた頃は、N t氏の作品をよく鑑賞したり、何度か一緒に発表したこともあった。N t氏からは、なにかのイベントがあればいつも僕に必ず知らせてくれる。なかなかその現場に行けないのが残念でならない。今、僕は活動する環境を変えようとしているところだ。今年の秋頃までに目処が立てばと思っている。N t氏には、改装を終えた新しい環境の場では非ともやってもらいたいと予定を立てている。しかもオープンなら最高である。連絡をしなければいけない。

京都に住むS y氏は、どうしているだろう。S y氏とは、僕の大学時代からの知り合いです。神奈川県の出身だと記憶しています。結婚の関係で、京都に移ったのだと思います。毎年僕に賀状を送ってください、賀状を出さない僕は発表する案内状とか刊行した冊子等を送っていました。そのような結びつきは、40年近くになるうとしています。その期間2人は1度も合ったことはなく、電話の声で数回だけお互いの存在を納得していました。S y氏の活動は、国際的である。版画、

写真などの発表を通してながら教育のことにも積極的であると思います。インドネシア方面にもアトリエを構えているらしい。合いたいと思います。是非とも岩手に来ていただき、新しい環境で発表していただければ幸いです。恥ずかしがり屋の僕に勇気を与えてくれると思います。連絡いたします。

この2人の男性のそれぞれの生き方、人生は、僕にとりとても大切な約束もなく駆け引きもない信じられる事実なのです。いずれ、東和町のまちテクの現場に、この2人の人生の一部を見せられることになるでしょう。毎回、このコーナーでは僕は僕の人生の良しとする人たちを紹介していくつもりです。

僕は小降りの雪の中を午後2時近くに家に着いた。昼食、いや今日1回目の食事だから僕には朝食と言った方が良いでしょう。枯れた小枝、いや可憐な花を持っていた幼い少女の姿が浮かんできた。よほど機嫌が良くなったのだろう、僕は暖房のきいた居間の座布団に座り、「東京セレナーデ」の曲を口ずさみながらテーブルの上に置いた抓みを確認しつつ、こよなく愛飲している缶ビールの蓋をプシュと開けたところ…。 つづく(5月6日)



N2 スタジオライブ 28 《SHIZUKUISHI 会議》「文具採集-記憶（自ら）のコレクター
2012年8月20日（月）～9月5日（水）
新里さんは「イエロープラントギャラリー」を自宅に開設しています。全くの等身大
であり、素のままの彼の生き方と完全に一致しています。

「マチてくギャラリー」 #4

2014 年 3 月 4 月の展示

鶴澤明民・新里陽一

花巻市東和町土沢商店街 22 カ所

発行 東和町土沢商店会連絡会 2014 年 5 月 30 日

企画・編集 toncacci atelier

花巻市東和町田瀬 14-120

代表 菅沼緑

roqu@me.com

<http://www.arttsuchizawa.com/>

<http://machikado.urdr.weblife.me/>

